

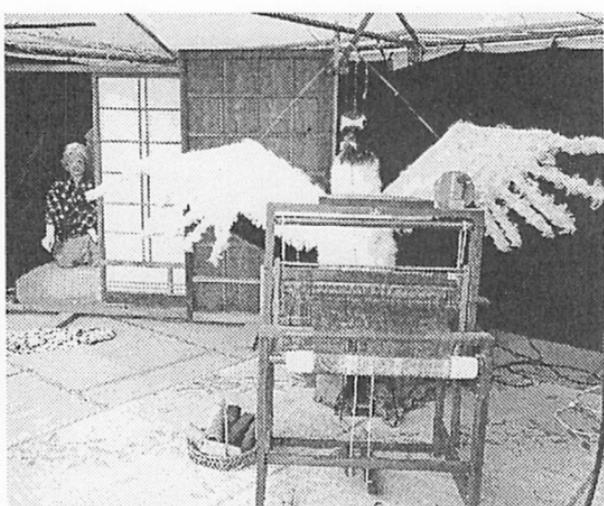
# やまと 民俗への招待

鹿谷 勲

1月27日午後、大立山まつりを覗いた。3年前から始まったこのイベントは、今年から会場を朱雀門前の広場に移し、四天王をかたどった「大立山」は、朱雀門前に置かれていた。大きな門に負けず堂々としているが、その威圧的な姿がかえって空しさを感じさせる。

その南の朱雀大路は、寒い中にぎわっていた。道の両側に仮設テントが長く建てられ、県内の立山行事の展示や各地の温かい食べ物や特産品が売られている。中央の広場では、御杖村桃侯の獅子舞などの芸能が公開され、人垣ができています。西側のテントでは、櫃

原市八木町の愛宕祭りに披露される立山があった。大和八木まち創り会が江戸時代のおかけ参りの接待の場所を模型で再現した「セントアイバ（接待場）」を展示している。向かいの東側のテントが御所市東名柄の天神祭りで行われる立山で、西郷どんと島津斉彬の相撲の場面や民話をモチーフとした「雷の落ちない村」などがあり、さらに広陵町三吉大垣内は、昨年の地蔵盆の立山のうち3点を展示している。羽生善治などの「国民栄誉賞表



広陵町三吉大垣内の立山（鶴の恩返し）

＝筆者提供

彰式「カーリングの「そだね」と昔話「鶴の恩返し」だった。

鶴が機織りをしている部屋の障子が開いておばあさんとおじいさんの姿

が見える。すると、機織りをしている鶴が、驚いたように大きく翼を広げるのだ。これが自動で繰り返される。見事なカラクリ仕掛けだ。旅館などにある電気マッサージュ機の動力部分を二つ用いて運動させている。保存会長の出井裕久さんに来栄えを褒めると、作った本人がいると紹介されたのが吉岡秀一さんだった。廃品の障子を見て、何かに使えないかと考え、このテーマになった。鶴の目は黒いボタン、羽根はアマゾンで手に入

れ、貼り付けるのが大変だったそうで、機は趣味で「さをり織り」をしている人から借りたという。あるモノを見て、それをどう利用できるかを考え、テーマを構想する。モノへの着眼とこれを生かす発想から物語へと立山の背景の知的な営みがよく分かる。「大立山」という誇大な言葉とは似合わない人々の機知が、土地ごとの「立山」に発揮されている。この知的営みを見る者は楽しむ。生活の場で行われる双方のこの営みこそが民俗行事なのだ。

（奈良民俗文化研究所代  
表）

## 立山の知的な営み

次回回は27日